

寄稿

1 近現代和歌山の建築遺構



京都華頂大学 教授

川島 智生

1 はじめに

明治から昭和戦前期に建設された建造物は近代化遺産とよばれ、観光資源となっている。これらの建造物が残すべきものとして定着したのは平成になってからで、建設年からはおよそ半世紀以上が経過している。一方未だに価値が定まらないのが、昭和20年代以降の建造物である。とりわけ昭和30年代から昭和40年代に建設された建造物の多くは耐震や老朽化を口実として、現在急速な勢いで取壊しの嵐にある。

すなわち二十世纪を生きてきた中高年の大人にとっては日々、見馴れた風景が消滅する時期を迎えている。建造物とは機能にとどまらず、ある種のアイデンティティを形成するよすがであったことを考えると、さびしい限りだ。が、いずれ誰しものがこの世から消えていくことを考えれば、世の摂理なのだろう。だがそんななかで後世に残さなければならない建物が、風景がある。

それは一見メモリアルなものや「物」としてレベルが高いものに注目されがちだが、庶民的なものであってもかけがえのないものもある。

ここで対象とする和歌山を考えれば、戦前までのものとしては県庁舎が有名であるが、筆者は県下各地に点在する煉瓦造による一連の紡績工場をまず挙げたい。廃墟の友ヶ島要塞も忘れられないものだ。戦後のものとしては戦災復興建築が戦後の原風景を形成する。代表的なものとして和歌山城や紀陽銀行本店などがあり、失われたものとして高島屋和歌山支店がある。

2 友ヶ島1889

近代和歌山最古の建造物は友ヶ島にある旧陸軍の由良要塞である。最初に訪れて以来30数年が経過するが、その都度思うことは自然に還った地形のなかで人工物の砲台や弾薬庫などの煉瓦造施設が有するある種の迫力である。空堀やトンネルによって構成される一見迷路状の地下通路は他では体験できない空間の魅力を体



友ヶ島第三砲台の住宅

感できる。しかもこの構築物が百年以上も前から存在していることに、ある種の永遠さを見ることができる。人気の秘訣である。

島の歴史をみていくと、修験道の行場であった所で、明治22(1889)年・明治25(1892)年・明治37(1904)年の3期に5つの砲台が建設される。敗戦後に第二砲台は米軍に爆破されたが、それ以外の一・三・四・五の砲台跡はほぼ手つかずの状態に残る。戦後は国立公園となり、南海電鉄グループが観光開発をおこなった。昭和36(1961)年には友ヶ島自然公園キャンプセンターが完成し、ハイキングコースが整備される。すなわち高度経済成長期に観光地として成立する。その後飽きられ、南海電鉄グループは撤退し訪れる人は減ったものの、アニメ「天空の城 ラピュタ」に登場する天空の城に似ていることから、若い人を中心に訪れる人が急増し、再注目される。

友ヶ島最大の見せ場である第3砲台にはあまり注目されないが、将校宿舎(看守衛舎)があり、その建物は両端が煉瓦造で中央部は木造の建物となる。銃眼は煉瓦壁のなかに花崗岩が埋め込まれ、そこに設置される。もう一端には竈があり、火を使うことから煉瓦造になったのだろう。現在木造部分は朽ち果てかけている。

3 紡績工場1910

和歌山県は明治期に綿ネル業の発展により、大正期にすでに工業生産高が農林水産業生産高を超えた「工業県」になっていた。その様子は「近時工業の発達」は和歌山市をして、工場軒を

連ね、煙突林列し、夏期綿ネルの加工期に天守閣上より市中を眼下すれば、其壯観如何に工業の繁盛なるかを偲ばしむ」(『和歌山大観』1915年)とある。

和歌山市を中心とした地域に、数多くの繊維産業の工場を屹立させていた。多くは煉瓦造の建物であり、現在も市内を歩くと彼方此方で煉瓦造建築をみるのはその時の名残である。ただその多くは太平洋戦争で米軍の空襲を受け被災し、戦後に復興するものの、高度経済成長期以降、現在に至るまでの間に次々と解体されていった。

さて2006年の調査の時点で和歌山市から御坊市にかけての地域には、赤煉瓦の偉容をみせる工場が現役使用されて、存在した。筆者が調査したなかで今も強く記憶に残る建物を記す。

まず和歌山市内の旧紀陽織布手平工場(明治



三菱電機変電所



三菱電線塵突

43年)である。その一部は三菱電機冷熱システム製作所として調査時に現役使用されており、筆者らは煉瓦造の旧変電所の実測調査を実施した。その後これら煉瓦造建物は解体され、紀陽織布の時代の建物はすべて消滅した。ただ和歌川を挟んで数百メートル離れた鷹匠町に旧紀陽織布社宅が現存する。手平工場の社宅として大正9(1920)年頃に建設されたもので、道路からみると、1階は煉瓦造、2階は木造となる。なぜ1階部分のみが煉瓦になったのかといえば、傾斜地という場所ゆえに、全部を木造でつくるのは難しく、1階のみを擁壁と考え、煉瓦造にしたのだろう。二戸一のセミデタッチハウスであった。計5棟がつくられ、4棟は煉瓦造の壁を残して廃屋となり、1棟のみが現存して旧態を留める。紡績都市であった時期の記憶を伝える遺構として注目される。管見の限り他都市にはこのような形状の社宅はみられない。

次は有田市箕島の旧紀伊莫大小紡績(大正14年以前)である。この工場は三菱電線工業和歌山製作所として使用されており、調査時には紡績工場を象徴する塵突が残っており、実測調査をおこなった。煉瓦造塵突の珍しい現存事例であったが、調査後に塵突は取壊された。

御坊市に隣接した美浜町の旧日出紡績松原工場(大正14年)はダイワボウマテリアルズ和歌山工場として使用されている。この工場は煉瓦造ではなく鉄筋コンクリート造になるものの、鋸屋根や塵突の形態は煉瓦造のスタイルを踏襲しており、構造が置換されただけのものであっ



大和紡績・食堂内部

た。この工場で驚かされたのは社員食堂の内部空間の様態である。木造ながらも天井の高い大空間を実現させ、バシリカ式で高窓から採光し斜めのガラスをとおして射し込む。天井は木板張りのヴォールトの形状、床はモザイクタイルによる市松模様、林列する柱の柱頭部には力の流れを表現した形がとられるなど、造形的にも美しい空間が出現していた。

三社ともに紡績工場の建物が転用されて、現役の工場として生き続けていることにある意味で驚かされた。経済的な側面から利活用されることになったものと考えられるが、工業県和歌山の息吹がここには残っていた。

4 県立学校1922

和歌山県下では戦前期には昭和2(1927)年竣工の三輪崎小学校(新宮市三輪崎町)以外に鉄筋コンクリート造小学校校舎の出現はなかったものの、関東大震災以前の大正11(1922)年から12(1923)年にかけての期間に海南・



元紀陽織布住宅(西山修司撮影)



三輪崎小学校



旧制日高中学校（松田茂樹所蔵）

伊都・日高の3つの中学校（現高等学校）と那賀農業学校（現那賀高等学校）の計4校の県立中等教育施設で鉄筋コンクリート造校舎が完成していた。いずれもが平屋建ての建物で、同一の設計図を用いて建設された。関東大震災以前に完成していたことは注目に値する。

設計者は和歌山県庁の建築技術者・松田茂樹であった。なお日高中学校の大正14（1925）年に竣工した管理棟について、松田は「この本館だけは関東大震災後、私の設計で建てたものでカーンバーは一切使用しなかった」と記した。

スタイルはセセッション風のファサードを示し、共通して車寄せが設置されていた。現在はすべての学校が建替えられたが、那賀農業学校の玄関車寄せだけが遺構として残されている。そこでは幾何学的な柱頭飾りに大きな歯飾り（デンティル）が特徴的な形をみせる。構造は現在の鉄筋コンクリート造以前の技術であるカーンバーという特殊な鉄筋で支えられてお



那賀高等学校旧玄関（出口孝志撮影）

り、一部にせよ保存されたことは鉄筋コンクリート造の技術史を探究する現物が残ったということによって一定の評価ができる。

この設計は松田茂樹が上司の技師野口源一により、鉄筋コンクリート造にすることが命ぜられたことに端を発する。だが大正10（1921）年12月に決まった県会での予算は木造と大差のないものであり困っていた時に、日本トラスコン社の宣伝員が和歌山に来て、「その会社で考案して発売している特殊鉄筋（カーンバー）を採用すれば、一般的な鉄筋コンクリート造と比較して大層安価に出来る」との話を受け、横浜に出向き、専属のアメリカ人技師と会い、トラスコン社の製品ならびに構造技術を使うことになる。この当時木造は坪100円であり、鉄筋コンクリート造は坪200円であったところ、坪120円で実行された。ただトラスコン社の方法を使ってもコストは予算額内には納まらず、廊下を廃し大きな廂だけの開放廊下やパラペットを簡略化したスラブとするなど、苦勞してコストを下げたという。

ちなみに大正10（1921）年当時は和歌山県下には鉄筋コンクリート造の建物は未だに誕生しておらず、鉄筋コンクリート造の設計できる建築技術者は誰もいなかった。松田が卒業した東京高等工業学校（現東京工業大学）でも鉄筋コンクリート造の講義が始まったのは大正7（1918）年卒業の松田の一級上からであり、黎明期ゆえの困難さがあったようだ。

5 高島屋和歌山支店1948

高島屋和歌山支店は戦後間もない時期に誕生し、わずか四年間で取壊されたためにほとんど知られなかった建物である。したがってリアルタイムで行ったことのある人は百貨店というよく知られた施設ながらもほとんどいない。だが建築系雑誌（『建築雑誌』・『建築文化』）には紹介されており、画期的な建築が出現していたと筆者は判断し、ここに取り上げた。

まず建築概要を説明すると、昭和23（1948）



和歌山高島屋外観（高島屋史料館所蔵）



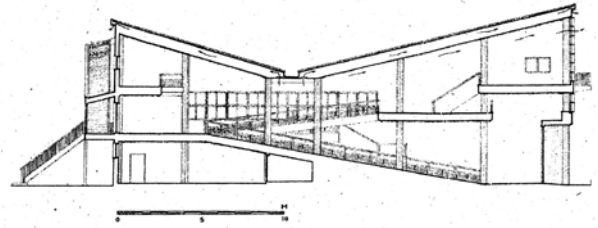
和歌山高島屋内部 見おろし（高島屋史料館所蔵）



和歌山高島屋内部 見上げ（高島屋史料館所蔵）

年9月に開店し、昭和27（1952）年8月に閉店している。設計は坂倉建築研究所の大阪出張所が担った。担当者は西澤文隆と村田豊であった。構造は鉄筋コンクリート造ではなく、木造の2階建であった。この時期は民間建築における鉄筋コンクリート造は禁止に近い状態であり、木造になったようだ。現在では百貨店のように入不定多数の人が集まる施設については防火区画などの制限があるが、この時期は建築基準法も定まっておらず、戦前からの市街地建築

WT 2071

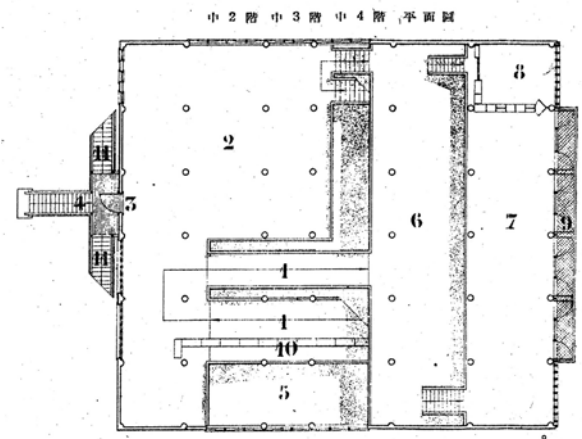


和歌山高島屋断面図

WT 2069



和歌山高島屋外観立面図



和歌山高島屋平面図

物法があっただけであり、仮設建造物的な扱いということで許されたのかも知れない。規模は建坪が196坪、延坪が401坪となり、いわば最小限の百貨店と位置付けられる。外壁は白色モルタル、屋根は波型スレート葺きとなる。

建築的な特徴は、内部空間が吹抜けで全フロア・各階ともに一体空間になっている点にある。内部の写真からは展示場のようなしつらえであったことがわかる。断面をみると、バタフライ型となり、通り側の表面とバックヤードのある背面では階数が異なり、表は二層、裏では三層となり、各階をつなぐのはスロープ（斜路）である。この吹抜け空間を支えるのが25本の

限りなく丸柱に近い多角形柱である。正確には「檜三寸角心持材を5本合せ、ボルト締めとし、適宜千鳥に継ぐことにより総て通柱同様の働きを持たせた」とある。中央に斜路が配され、スキップフロアになった各階に渡される様態はル・コルビュジェのサヴォア邸を想起させる。坂倉建築研究所の主催者坂倉準三はコルビュジェの数少ない日本人弟子であって、その如実な影響がうかがえる。

短い間隔にかわされた水平の板上に矩形の方立を並べ、ガラスのファサードの防護面を構成する手法は昭和14（1939）年に坂倉準三が設計した新京南湖住宅計画の中での住宅の立面に共通する。バタフライ型で、壁面処理は酷似していた。さらに坂倉準三の処女作である昭和12（1937）年にパリに完成した万国博日本館のファサードや内部空間のありようが高島屋和歌山支店に反映されていた。なお高島屋和歌山支店は坂倉準三にとって戦後2番目の建物であった。設計実務を担った西澤文隆が部下の好川忠延に語った話によると、戦時中のレオナルド・ダ・ビンチ展示場の設計案とも関連したようだ。



紀陽銀行本店

坂倉準三はこの建物の設計に際し、次の理念を語った。「生きた建築その各構成部分の悉くに生命が通い全体として生きている建築の見本を造ること之が設計者の願いであった。この生きた建築こそ新しい世界に繋がる新しい日本の建築となる筈」と記した。65年前に取毀されたが、戦災復興建築のなかでも特筆に値するものであったといえる。

6 紀陽銀行1954

戦後の和歌山を代表する建築である紀陽銀行本店を見るために、およそ四十年ぶりにぶらくり丁に出掛けた。昭和29（1954）年に建設され、63年間この場所に存在し、現役稼働している。竣工当初は県外からも多くの見学者がこの建物を訪れたという。かつては繁茂をきわめたこの界限は車社会の進展により、戦前からある老舗百貨店の丸正をはじめ、大丸とこの地から相次いで百貨店が消滅した。そのこともあって時間が止まった感を呈し、戦後昭和40年までに形成された景観が残っている。

設計は大阪の日建設計工務が担い、担当は岡橋作太郎であった。スタイルは花崗岩張りの新古典主義風の列柱が正面に並び、細部の処理はアールデコ風となる。壁面に取り付く浮彫彫刻は和歌山県の主要産業を示す。全体としての印象は昭和10年代の延長線上にあり、彫刻は和歌山県出身の彫刻家保田龍門による。1950年代という時代を示す貴重な建造物であり、戦災復興建築のひとつである。

本文中の写真は高島屋・旧制日高中学校・元紀陽織布住宅・三輪崎小学校・那賀高等学校を除いては、川島智生の撮影による。

■謝辞

遠藤佳子・田中嘉一郎・西山修司・高垣晴夫・竹中康彦・出口孝志・中西重裕・林和久・天郡義展・好川忠延の各位には本研究の過程で協力を得た。感謝の意を表わしたい。